

【ねがいはしては】

平成28年8月25日

KYOWA SCHOOL

第310号

「謙虚につつましく」

ある日の新聞に、「北の国から」倉本聰さんの記事が載っていました。私もこのドラマが放映された頃は、大自然の中の暮らしにあこがれていました。そこへやってきた父と子2人の計3人の生活、その土地に暮らす様々な人々、大自然と父の愛を受け、2人はすくすくと育ちます。やがて2人はそれぞれ成人し、父は自身が作った石の家で暮らします。やがて、齢を重ね息子と娘に遺言を書きます。

「金なんか望むな。倅だけを見ろ。自然から頂戴しろ。そして謙虚に、つつましく生きろ。」

残してやるものなど何もない。父は「ことば」を、崇高で力強い「ことば」を、子どもたちに贈ります。

長男は地元の中学校を出、そのまま東京へ就職。都会の冷めた空気の中で傷つきながらも、そのたびに父を思い過ごします。娘は看護師になりながらも、懸命に生きようとします。

父役の田中邦衛さんの泥くさい、汗くさい演技は、私の理想の老後です。人の魅力を教えてくれます。まだまだ足もとにも及びません。家族を想うストレートさ、喜怒哀楽を何の躊躇もなく外へ出す。そこには金銭では手に入れることのない本物の「しあわせ」が漂います。

都会の慌ただしさの中であつという間に流れていく時間。それはひとりひとりが自分だけに許された終演への道。その道を味わうことなく競争の中に身を投じ、ストレスを感じ、周りを意識し、比較し、「私の家は上流だ、中流だ、下流だ・・・。」

我が子の出来を親類やご近所さんと比較し、イライラを募らせる・・・。そしてそんなはずではなかった失言を子に浴びせ後悔する・・・。

そんな毎日を、瞬きをするのも忘れてしまう位のスピードで過ごしています。

夏休みが終わろうとしています。ご確認ください。

我が家子どもたちと、すてきな思い出づくりができたのかな・・・。

やがて子が父になり母になり、子に何かを残すときが来るのかもしれない。そのとき、五郎役の田中邦衛さんのようなプレゼントを用意できたらどんなにすてきだろうと思います。

DVDの中で、五郎が綴る言葉の中に、「勝手に生きろ」という一節があります。

なんてすてきだろうと思います。この言葉は全身全霊の信頼がなければ発することのできない言葉だと思います。「おれはお前らを信じている。俺は俺の生きたいように生きてきた。数え切れないしあわせをいただいた。今度はお前らがしあわせを掴む番だ。それには、それには謙虚につつましく生きろ・・・それがいい。」

今、まさに今、そんな気持ちで我が子に接することのできる「一つの屋根」・・・。

私は時折現実を視野に入れざるを得ない表現を子どもたちにすることがあります。高校受験であつたり、定期テストであつたり・・・。そのたびに何かすっきりしない、悶々とした気持ちを味わいます。それがなんだかはっきりせぬままその日が終わります。きっと、五郎さんが言っているこの言葉を裏切るような表現になっているのかなと、今思っています。

その時を精一杯に生ききっていればいい。結果はどうであれ、その精一杯に向かっていたその姿が尊いのだ。

今年のキャンプで精一杯に向かっていた参加者たち・・・。遊ぶことも精一杯、食べることも精一杯、そして勉強に向かうことも精一杯。

もっとも尊いと感じるのは、キャンプ場の仕事ができただけです。マットレスや毛布を受け取ります。それを湖畔のガードレールに干していきます。数時間後、たつぷりとお日様からのごちそうをいただいたマットレス、毛布をトラックへと積んでいきます。積み終わったあと、荷台のマットレスのてっぺんに「大」の字になって横になり空を見上げます。トラックは走ります。景色がご褒美だよといいながら降りそそいでいきます。何という贅沢なプレゼントだろう・・・。

働くって素晴らしい・・・。何の見返りも期待しない、欲もない、そんな心の中に大きな大きな景色というプレゼント・・・。

五郎さん家族が北海道で受け取ってきたものを感じました。

生きるってこういうものなのかな・・・。つかの間の夢のような時間は終わりを告げ、また都会の中に埋もれながらの生活が始まります。どこを見ても競争だらけ・・・。他人だらけ・・・。人と人がすれ違っても赤の他人・・・。

このちっぽけな教室の中だけは、助け合う人々で賑わっている・・・。子どもたちの明るい笑顔であふれている。

そんな光景が当たり前になったらいいなと思います。そんな気持ちを抱かせてくれたのも、キャンプ場での当たり前なお手伝い・・・。団体さんが帰ったあと、静まりかえったキャンプ場をきれいにしていく・・・。トイレからの鼻をつくアンモニア臭を追い出す。危険はないかなと一つ一つのバンガローを点検する。このあとやってくるお客さんたちにすてきな思い出を作っていただくために・・・。

キャンプ場で楽しそうに生活する家族の姿が目につかびます。家族さん、ありがとう。